

会頭コラム「自由であるということ」

秋の夜長に本を読み返しました。「夜と霧」という邦題のこの本は、ナチスの強制収容所から奇跡的な生還を果たしたユダヤ人のヴィクトール・フランクルという精神科医が、その過酷な環境の中で、囚人たちが何に絶望したか、何に希望を見出したかを冷静かつ克明に記したものです。戦争がいかにも人間を狂わせるかの様もリアルです。1946年に出版された本書はあまりにも有名な世界的なベストセラーなので、今更と思われるかも知れませんが。

フランクルは言います。「そこに唯一残された、生きることを意味あるものにする可能性は、自分のありようががんじがらめに制限されるなかでどのような覚悟をするかという、まさにその一点にかかっていた。」
「どんな状況でも『その状況に対する態度を決める自由』だけは決して失われない」と。

あれほどの物理的にも精神的にも極限の状態にありながら、人間が人間としての威厳を失わず、その状況を生き抜ける力の源とは何なんだろう？ 真の人間の生きる力とは？ そんな難しい問いを投げかけてきます。

著者の置かれた極限状況とは比べるべきもないですが、私たちの周りにはいろいろな課題が山積しています。例えば、まちづくりのこと、原発やエネルギーのこと、集団的自衛権こと、さらには資源や環境問題など。それらの課題は、自分はそのそれぞれの立場に留ったまま、敢えて自ら受け止めることをせず、自分の頭で考えることなしに他人(ひと)ごととして誰かに任せてしまう方がずっと楽なことばかりです。でも本当はとても大切なこと…。せつかく私たちには自ら考え行動する「自由」が与えられているのに…。

「面倒くさがらず、他人の眼を怖がらず、今、自分ができるとはどんなに小さくともやっていこう」と自戒を込めて、自らへの叱咤激励を繰り返しています。私の中で著者の言葉がその重さを増しています。

追申:小田原駅地下街がオープンをしました。何とかまち全体にとって意味のある場所にしていかなくてはなりません。わが商工会議所も傍観者でいいはずはありません。いい方向にと何ができるか思案しています。そのために積極的に行政に働きかけることが必要と思い、要望書を提出しました。

要望書は下記サイトをご覧ください。

<http://www.odawara-cci.or.jp/information/20141110.html>

会頭 鈴木悌介